

平成21年5月25日現在

研究種目：基盤研究（B）
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18320018
 研究課題名（和文）場所をめぐる宗教的集合記憶と観光的文化資源の関係に関する宗教学的的研究
 研究課題名（英文）A religious study on the relationship between collective religious memories of places and cultural resources for tourism
 研究代表者
 山中 弘（YAMANAKA HIROSHI）
 筑波大学・大学院人文社会科学部研究科・教授
 研究者番号：40201842

研究成果の概要：

本研究は、特定の場所をめぐる宗教的集合記憶と観光的文化資源との多様な関係の在り方を検討するために、長崎県の平戸市根獅子町、新上五島町、山形県出羽三山、沖縄、中米グアテマラを対象とした調査を実施した。伝承された宗教的集合記憶は、ツーリズムを梃子にした集落の再生の試みの進展に伴って再編成されつつあり、その動きに大きな影響を持っているのがメディアと世界遺産指定である。また、聖地の持続的な管理とツーリストの倫理的行動を要請している。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	2,500,000	750,000	3,250,000
2007年度	2,600,000	780,000	3,250,000
2008年度	2,000,000	600,000	2,600,000
総計	7,100,000	2,130,000	9,230,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・宗教学

キーワード：聖地、カトリック教会群、カクレキリシタン、ツーリズム、集合的記憶

1. 研究開始当初の背景

(1) 特定の場所をめぐる聖性の研究は、宗教学において聖地研究ないし巡礼研究として行われてきた。しかし、こうした先行研究で論じられている聖地の聖性は所与的で、実体的、静態的なものを前提にする傾向が強く、場所の聖性の変動という側面はほとんど問題にされてこなかった。

(2) 「観光」という切り口は宗教現象と無関係なものとされまったく考察の埒外におかれてきた。しかし、宗教文化の観光的資源の可能性が注目を集め、行政や産業がそれら

を積極的に利用しようとする今日の状況において、現代宗教の変動の一側面として、場所に関わる聖性と観光的行為との関係を実証的に正面から論じてみることはきわめて重要である。

(3) 行政や観光産業は宗教文化を地域振興や経済的利益でのみ考える傾向があり、その対象となっている宗教的世界への認識は驚くほど乏しい。そのため、宗教文化が観光の対象となる際にも、人間の実存的な問題に深く係ることがある宗教文化の特質をほとんど斟酌しないという実情が存在し、一部の

宗教側からの強い反発を招いていた。

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、日本における宗教変動を中心に「場所のもつ聖性」という問題に焦点をあわせて、特定の場所に付与された聖性のもつ歴史性を集合的記憶という概念で捉えたうえで、その聖性の変動を観光的文化資源という問題を切り口にして、具体的事例に即して実証的に考察しようというものである。

(2) 主な調査地としては、長崎県平戸市根獅子町、新上五島町、山形県出羽三山、沖縄、中米グアテマラを選定した。もちろん、調査だけでなく、文献を通じた理論的検討もおこなう。

(3) それらを通じて、①特定の場所にまつわる歴史的に共有された集合的記憶と聖性との係わり、②その聖性の変動と観光事業との関連を、具体的に明らかにしたいと考えている。

(4) 宗教文化に係わる観光事業に対して、宗教文化のもつ特質を伝え、宗教と観光という一般に両立が難しい両者の橋渡しを考える。

3. 研究の方法

(1) 研究方法は、フィールドワークを通じて聞き取り調査、および参与観察である。

(2) 但し、長崎カトリック教会群の世界遺産化をめぐる動きについては、以下の調査領域を設定した。①カトリック教会の聖職者、②祈りの場として教会を使う地元の信徒たち、③教会の文化遺産としての価値やそこにスピリチュアリティを感じる文化人、ツーリスト、④県及び地方自治体の観光課と観光業者。

4. 研究成果

(1) 多くの調査地域において、伝承された宗教的集合記憶は、近代化の進展によってそれを維持してきた集落が衰退し、危機的な状況を迎えているものの、ツーリズムを梃子にした集落の再生の試みの進展に伴って再編成されつつある。例えば、平戸市の根獅子地区では、高度経済成長において、地域の人々が地域外へと流出し、この地域に存在していたカクレキリシタンの組織が解散を余儀なくされた。この解散は、組織を支える役職者の欠員を補充することができなかったことに由来するが、この組織の解散は、地域が担っていた殉教の記憶の保持を著しく困難にしたといえる。しかし、長崎県の目指しているカトリック教会群の世界遺産指定への動きの中で、カクレキリシタン関連の事跡の確認、保存の必要性が議論され、殉教の記憶を保持していた根獅子地区への注目が集まっている。その

ため、平戸市でも、市の観光協会が企画してきた観光商品「キリシタン紀行」の一貫として、根獅子のカクレキリシタンの事跡を積極的に活用しようという方向性が表れている。

(2) この再編成を地域の人々は決して否定的なものとして受け取っているのではなく、むしろ、こうした動きを通じて、地域住民の間に、自らの固有の記憶の再活性化を行おうという動きが起こっている。例えば、先に指摘した根獅子地区においては、地域組織の指導者たちが協力して、地域に散在し、これまであまり顧みられてこなかったキリシタン関連の事跡などを歩いて周り、それをマッピングして、ツーリストたちがそれらを回って歩けるように工夫する動きが起こっている。これは、この地域の活性化のために、自分たちがもっていた殉教の歴史という固有の記憶を動員しようとする試みといえよう。

(3) こうした動きに大きな影響を持っているのが世界遺産指定ないし国内暫定リストへの登載である。これによって、当該自治体の取り組みが大きく規定される。とりわけ、観光が地域の大きな経済的な柱である場合には、世界遺産が生み出す経済効果は非常に大きなものがあり、県の取り組みは、その傘下にある自治体の取り組みを大きく規定することになる。例えば、根獅子地区の場合、これまで聖域として発掘がためられていた「ウシャキの森」に、市の文化財保護課が発掘を行った。これまで、あまり積極的な動きを見せていなかった市の対応の変化は、県が世界遺産指定に向けて深い関心を持っているカクレキリシタンの事跡の発見の必要性に大きく規定されていると思われる。

(4) 世界遺産指定ないしリスト登載に伴うツーリズムの進展は、特定の場所の聖地化をもたらすと共に、その管理の必要性和ツーリストの倫理的行動を要請している。観光倫理に関する研究は、観光学のさまざまな領域のなかでも遅れている領域だと言うべきであろう。英米においては、観光倫理に関して哲学的議論とビジネスの側からの価値観とを織り交ぜて理論的構築を目指したフェネルや、西洋的価値観に基づく観光開発の限界と問題性を指摘したスミス及びダフィなどかなりの数の研究が見られるが、日本の観光研究では少なくとも観光倫理を中心的主題とした論考は少ないのが現状である。その理由としては第一に、観光開発・観光振興を地域社会あるいは地方公共団体にとって「善きもの」だとする了解が、多くの観光研究に明示的・暗示的に前提されることが多いため、観光倫理という根源的で難解な問題には

踏み込まない、あるいは等閑視して済ませようとする傾向があるという点が挙げられるよう。

- (5) 集合的記憶に関与しない、ないしそうした記憶が乏しい場所が聖地化する上で、メディア、とりわけ深井東洲や江原啓之といった宗教的タレントの介在する余地が大きい。こうした人々は、メディアにおける影響力を使いながら、特定の神社などを聖地に指定しており、それを読んだ人々が数多くそこを訪問するという現象が起きている。これは、地域の人々の意識とは無関係に、メディアを通じて聖地が新たに作られているということであり、これは、これまでに指摘した地域に固有の集合的記憶という問題とは別ではあるものの、「場所」をめぐる観光資源化の動きとして注目して良いものと言えよう。
- (6) グアテマラのようなポストコロニアルな「場所」において、民衆の間に植民地時代の記憶を基底に両義的な性格をもつマシモンという神が生み出されており、それもまたツーリズムの対象となっている。このコンテキストでは、観光はコンタクト・ゾーンと位置しているといえる。この問題は、空間に限定されている特定の場所をめぐる記憶の問題と言うよりも、政治・歴史的に、その地域が位置していた場所がかかっているある種の矛盾が、ユニークな神として表象され、それが今日では観光資源として注目されているということであるが、こうした問題は、ともすると宗教的文脈からの集合的記憶という問題に限定しがちな議論を、より広い政治・歴史的な文脈に置いてみることの重要性を明らかにしているように思われる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 12 件)

- ① 山中弘、「聖化される場所、世俗化する場所と観光ブームについて」『宗教と現代がわかる本 2008』平凡社、pp. 184-187、2008、査読無
- ② 山中弘、「キリシタンという記憶」のポリテイクス—長崎カトリック教会群の世界遺産化を事例として—『宗教と社会』第 14 号、pp. 222-225、2008、査読無。
- ③ 寺石悦章、「深見東州の聖地論」、『四日市大学総合政策学部論集』第 8 巻第 1・2 合併号、pp. 45-60、2008、査読無。
- ④ Matsui, K.、Recent Trends in the Geography of Religion in Japan, *Geographical Review of Japan*, Vol. 81, 311~322, 2008、査読有。

⑤ 松井圭介、「世界遺産・観光・宗教—キリシタンをめぐる交差するまなざし」、国際宗教研究所編『現代宗教 2008』、秋山書店、pp. 168~195、2008、査読無。

⑥ 木村勝彦、「長崎におけるカトリック教会巡礼とツーリズム」、『長崎国際大学論叢』第 7 巻、pp. 123-133、2007、査読無。

⑦ 笹尾典代、「San Simon」: God Passing Boundaries— Ethnic Identities and Boundary Dynamics in “Contact Zone” of Post-colonial Guatemala — *Keisen University Bulletin Vol. 19.* (恵泉女学園大学紀要第 19 号) pp. 3-22、2007、査読無。

⑧ 寺石悦章、「江原啓之の聖地論」、『四日市大学総合政策学部論集』第 6 巻第 1・2 合併号、pp. 21-36、2007、査読無。

⑨ 山中弘、「聖性の源泉を求めて—久賀島の牢屋の窄とキリシタン墓地を訪れて—」『聖母の騎士』3月号、pp. 2-5、2006、査読無。

⑩ 木村勝彦、「教会とツーリズム—世界遺産運動をめぐる—」『聖母の騎士』2月号、pp. 2-5、2006、査読無。

⑪ 松井圭介、「観光戦略としてのキリシタン—宗教とツーリズムの相克—」『人文地理学研究』30号 pp. 147-179、2006、査読有。

⑫ 松井圭介、「宗教ツーリズムのポリテイクス—長崎における世界遺産運動—」、『平成 17 年度地域再生と観光戦略プロジェクト報告書』、pp. 42-56、2006 年、査読無。

[学会発表] (計 6 件)

① 山中弘、「宗教的集合記憶のポリテイクス」日本宗教学会、2008 年 9 月 16 日、大正大学。

② 松井圭介、「巡礼創造のダイナミズム」、地理空間学会、2008 年 6 月 21 日、筑波大学。

③ 山中弘、「宗教とツーリズムをめぐる」、日本宗教学会、2007 年 9 月 17 日、東北大学。

④ 木村勝彦、「長崎の教会群と世界遺産」、日本宗教学会、2007 年 9 月 17 日、東北大学。

⑤ 松井圭介、「観光戦略としての宗教—長崎県におけるキリシタンをめぐる—」日本宗教学会、2007 年 9 月 17 日、東北大学。

⑥ 平良直、「場所の記憶と中心の再構築—沖縄意識の形成と観光という舞台—」日本宗教学会 2007 年 9 月 17 日、東北大学。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山中 弘 (YAMANAKA HIROSHI)
筑波大学・大学院人文社会科学部研究科・教授
研究者番号: 40201842

(2) 研究分担者

木村 勝彦 (KIMURA KATSUHIKO)
長崎国際大学・人間社会学部・教授

研究者番号: 10195357

木村 武史 (KIMURA TAKESHI)

筑波大学・大学院人文社会科学部研究科・准教

授

研究者番号：00294611

笹尾 典代(SASAO MICHIYO)

恵泉女学園大学・人文学部・教授

研究者番号：60348294

寺石 悦章(TERAISHI HOSHIAKI)

四日市大学・総合政策学部・准教授

研究者番号：00340414

松井 圭介(MATSUI KEISUKE)

筑波大学・大学院生命環境科学研究科・准教授

研究者番号：60302353

平良 直(TAIRA SUNAO)

八洲学園大学・生涯学習学部・准教授

研究者番号：40334015